

——スクロース

シヨ糖とも。分子式 $C_{12}H_{22}O_{11}$ 。マルトース（麦芽糖）などと並んで、代表的な二糖の一つ。α-グルコース（ブドウ糖）とβ-フルクトース（果糖）が脱水して結合したもの。常温では白い結晶、一六〇度で融けて飴状になり、二〇〇度で褐色に変わる。一般に砂糖と呼ばれる物はこれであり、調味料としての使用の他、その性質を利用して、鼈甲飴やカルメ焼きなどの菓子に用いられる。

上手いなあ、と思う。珈琲茶碗に向かう途中、目に付いた綿菓子屋だ。入口を潜るとすぐ、辺りに漂う焦げた砂糖の匂いが気になったが、此処から届いていたのである。

他の売店が様々な色や、点滅を繰り返す電飾で人目を惹こうとするのに対し、この店は薄暗い裸電球しか点けていない。大きな盥たらひのような機械を台に乗せ、前面を透明なビニールで囲っている。後ろには赤と黄色の縞模様の服を着た若い男が立ち、機械の中

を掻き廻すような動作を繰り返していた。そうやって出来上がった綿菓子も、制服と同じ赤黄縞の袋に入れては、屋台の軒先に吊るして行くのである。

離れて見ていると、時々何人かの親子連れや、小銭を握った子供が立ち寄っては、袋詰めのお饴を買って行く。係の男は休みなく盥を掻き混ぜるが、軒先が袋で一杯になる様子は無い。このような遊園地や縁日では定番の店なので、特に目立つ訳でもないのに一定の売り上げがあるのだろう。

近寄ってビニール越しに覗き込むと、機械の中心に金属製の円盤が廻るのが見えた。彼は、そばの四角い缶から茶色い粗目を掬い取ると、盤の真ん中の穴にざっと放り込む。途端に盥の周囲に雲のような砂糖の綿が付き始め、男は割り箸を持って手際良く巻き付けていくのだ。

実は自分でも、故郷の街でやったことがある。夏祭りの時に、商店街の出店で自動販売機が置いてあったのだ。百円玉を入れると機械が動いて粗目を注ぎ込み、客が自分で割り箸に巻き取るというあれである。

しかしその時は、どうしても砂糖の糸が上手く絡まってくれず、箸にはほんの少しの綿しかくっついて来なかった。共に居た連れもやっではみたのだが、やはりどうしても僅かな砂糖しか回収出来ない。その為二人で、どうして屋台の人達はあんなに上手く出

来るのだろうと不思議がったものだが、此処でも改めて同じ思いをしている訳である。と、さつきから見詰められているのが気になったか、男が顔を上げて、

「食べるのかい」

と、訊ねてきた。見ていただけで買わないのでは、商売にならないとでも思ったのか。しかし表情は穏やかで、咎める様子も無い。

だが、砂糖の焼ける匂いは、確かにそそのるものが在るのも事実だった。そこでポケットから小銭を出し、そばに貼られた紙にある金額を選び分けて差し出す。男は前に出て金を受け取ると、手を伸ばして袋を一つ取ってくれた。口に巻かれた護謨ゴムを外して中身を取り出し、さて袋はどうしようと考え。すぐに男が察して、

「護謨とビニールはこっちにくれればいいよ」

と言いながら、手を出した。

有り難う、と頭を下げながら要らない物を渡してしまい、ふわふわした塊の端に口を付ける。それはすぐに舌先で溶け、甘さだけが口中に拡がった。焦げた飴の香りが鼻腔に昇って来る。

口中にはほとんど何も残らない、純粹な甘味の精。

唇の周りに溶けた砂糖が付くのを気にしながらも、更に薄茶色の塊を舌に乗せていく。

綿菓子を見る見る小さくなり、次第に細い芯棒だけになっていった。

そうしている間も、店員は新しい粗目を機械に入れ、尚も次の割り箸を操っている。彼が三温糖の粒を円盤に流し込むと、融けた砂糖が振り廻され、糸を引いて周囲に散る。それを棒で掻き取る訳だが、あの間合いを測るのが難しく、ともすれば、すぐ盥の内側に貼り付いてしまうのだ。そうならもう綿の状態にすることは出来ず、そこが腕なのである。

買った綿菓子を舐めてしまうと、彼は、

「割り箸もこつちにおくれ」

と言つて手を差し出す。棒を渡すと、相手は、

「これで口を拭くといい。頬つぺたがべとべとだよ」

と、濡れた紙をくれた。

少し気恥ずかしくなつて紙を受け取り、唇の周囲を綺麗にする。彼はその塵をも受け取ると、今度は未開封の緑茶缶を出す。

「そのまんまじゃ、口の中が甘過ぎるだろ。これは奢りさ」

何故、こんなに親切にしてくれるのだろう。ずっと見ていたただけなのに。

「いや、坊やが下げている石のせいだよ。初めて見せて貰ったんだ。そのくらいはして

もいい」

胸に下げた飾りの方に顎をしゃくる。言われてみると、碧光石が淡い緑の光を放っている。綿菓子を作る屋台の機械、これが発する熱を吸い取って、光に換え始めたのだから。

缶のお茶を飲みながら、尚も男のすることに見惚れ続ける。彼は篋くらを出して、周りの筒の内側に付いた砂糖を削り落とした。如何に上手くやったとて、完全に砂糖の糸を絡め捕れるものではない。こうしてやらないと、こびり付いた滓はどんどん増えてしまう。そうやっている間にも、時々親子連れや手を繋いだ子供達などがやって来ては、袋詰めの商品を購って行く。園の入口から左に向かつて一番近くの乗り物である珈琲茶碗、そこに行くまでの間、つい目に付くというところなのだろう。

ふと、男が訊ねる。

「やってみるかい」

いいのだろうか。本当は作ってみたくて仕方が無かったのだ。前の経験はあっても、こうやって見ている分には至極簡単そうに思える。だが……。

一瞬、断ろうか、とも思った。又失敗したくはないのである。粗目を無駄にしては悪いし、機械を汚してしまっても拙い。

しかし彼は、逡巡するこちらの顔を余所に、

「大丈夫さ」

と言つて、割り箸を渡した。

そこで思い切つて、ビニールの向こうに廻つてみる。機械は自分には高過ぎたが、男がそばにある木の台を寄せてくれた。何の為に置いてある物かは判らないが、乗れば意外に丁度良い高さである。

「砂糖を入れるよ」

缶から粗目の茶色い粒を採り、真ん中の筒にぎつと入れる。すぐ、周りに甘い糸が現れ始めた。

「さ、巻き取つて」

横から言われて、慌てて割り箸を突っ込む。やはり大変に難しい。周囲の壁面の内側は見る見るうちに残滓で汚れていき、割り箸にはちっぽけな塊しか残らなかつた。

「ううん、やっぱり難しいようだね」

係の男は篋を出して滓を掻き取ると、膝を折つて台の下にしゃがみ込んだ。

「こっちの砂糖を使つてご覧」

手に、飲み物の缶位の硝子瓶を持つて立ち上がる。中には粗目に似た、小さく真っ白

な粒が入っていた。白熱灯の黄色い光の下でも、純度はすぐ判る。精製された砂糖の結晶だ。

そういえば、この店では、青や赤の飴は売っていない。見ている限り、茶色の粗目ばかりを使っている。

「これを使えば、誰でも上手に出来るよ」

彼は、計量カップ半分程に白い粉を入れて渡してきた。

「割り箸はいらぬ。ただ、入れるだけでいいんだ」

どういうことか、とは思ったが、とにかく右手に持っていた惨めな作品を舐めてしまふと、割り箸を渡して器を受け取る。

「本当は、困いのビニールとかも取っちゃった方がいいんだけどね。さ、一気に——」

言われるままに、白い粉を中心の筒に空ける。回転と共に、先程まで見ていた物よりずっと真つ白な、透き通った糸が現れた。と、見る間にそれは台を離れ、空中に浮かび上がる。

「ほら、上手くいった」

浮かんだ綿菓子^{たんぼぼ}は、空中で蒲公英の綿毛のように集まると、そのまま小さな塊となつて散って行く。同時に、辺りにあの、砂糖の焦げる匂いが、今までに増して強く漂い始

めた。

「この砂糖はね、匂いだけを固めて合成してあるんだ。宙に浮かんで飛び散ってしまえば、後には何も残らない。作り方は秘密だけだね」

男は事も無気に言った。

「だからお客さん達は、遊園地の何処に行っても、綿菓子匂いを嗅ぐことが出来る。それにこれは、服なんかを汚したりもしない」

蒲公英の綿毛は尚も周囲の空中に漂い、辺りを彷徨っている。手を伸ばして触れようとすると、それは指先で、たちまち無となって消え失せた。指を擦り合わせても、何の跡も感じられない。成程彼の言う通りだ。

「で、これから何処に行くの？ 独りつてのは珍しいけど、その石を持ってるんだから、そういうこともあるかな。じゃ、気を付けてね」

彼の言葉に、もう一度感謝の意味で頭を下げ、屋台を離れる。周囲の綿毛は少しずつ宙を昇って行き、ほとんどが手の届かない高さにまで達していた。

砂糖の匂いに包まれつつ、左手に向かう。気が付くと、さっきの缶を持ったまままだ。もう、とつくに空になっている。そばの空き缶用の塵箱にそれを放り込むと、傍らに立つ金属製の矢印に、「珈琲茶碗」と書かれているのが目に入った。